



第123号

2015年10月15日発行

千葉大学教育学部
同窓会〒263-8522
千葉市稲毛区弥生町1-33

偶然が作る出会い

（同窓会の役割を考える）

千葉大学教育学部同窓会副会長 八木 雅之
(S44・3卒)

古希を目前とする年齢になった。今や「古来まれ」な時代ではないが来し方を振り返るには良い機会でもある。御多分に洩れず私も教員を目指し、千葉大学に入学したが、それも両親が前身である師範を卒業していること、地元大学であること等、平凡な理由である。ところが、今振り返ってみると「千葉大入学」は、私自身の人生を左右する大きなエポックであったといえるのだ。

私の教員人生には四つの大きな転機がある。千葉大入学、附属小への着任、教育行政への転出、大学における教員養成との関わりである。千葉大に入学したおかげで妻と出会うことができた。クラスも課程も異なるのに小中とも同じ学校・学年の教育実習配当が契機だった。附属小への着任も陸上競技部に所属していたために、顧問の島田教授の推薦があったと聞く。

教育行政との出会いも偶然の所産

で、地区から派遣されていた前任者が急遽帰任したためと聞く。大学教員は県教委の御配慮による。これらの出会いを通じて、人智の及ばないところで、多くの先輩・同僚諸氏が私如き者のために尽力くださったのである。全ての偶然が、このキャンパスから始まったと総括できる。

同窓会は文字通り同じ学びの場を共有した者の集まりである。全く知らない者同士でも、千葉大教育学部をキーワードにすれば話題を共有できる。「あの時、〇〇教授が」「Aランチは五十円だった」「卒論発表会でドジを踏んで」等々、あつという間に当時にタイムスリップできる自分に気づく。普段はあまり気にしなくてもいざという時、往時に思いを馳せ、身の幸せを感じ取れる、そんな会でありたい、と思いがら会務にあたる毎日である。



千葉大学教育学部附属小学校は、来年二〇一六年に統合五十周年を迎える。統合とは、一九六六年（昭和四十一年）に、千葉大学教育学部附属第一小学校（旧千葉師範学校男子部附属小学校・現在の千葉市亥鼻）と千葉大学教育学部附属第二小学校（旧千葉師範学校女子部附属小学校・現在の四街道市）が統合し、千葉市弥生町に移転したことを指す。し

七四年（明治七年）に千葉小学校から千葉師範学校へ、一八九八年（明治三十一年）に男子部と女子部から成る千葉県師範学校附属小学校へと改称した。

自由教育の伝統が
生きる附属小学校千葉大学教育学部附属小学校長
(千葉大学教育学部教授) 片岡 洋子

十年）には全国から多くの参会者を集めて第一回自由教育研究会を開催して、全国の自由教育の拠点校とした。「学級王国」という言葉も、この時期、学級担任が学級経営を主導する重要性を説いた手塚が名付けたものである。

やがて戦時体制が強まる中で自由教育は禁じられていき、千葉の教育界を追われた手塚は、東京の目黒区に自由が丘学園を設立した。

自由が丘学園は経営難から閉校に追い込まれ、二年後に手塚は他界した。しかし自由が丘学園はトモエ学園に継承され、そのトモエ学園の思い出を綴った黒柳徹子さんの『窓際のトットちゃん』が一九八一年に出版されると、大ベストセラーとなった。

手塚岸衛が試みた自由教育が附属小学校にどのように継承されているかは検証し得ないが、現在も学年や学校での行事では、低学年から高学年まで、子供主体の運営があたりまえに行われている。五月の運動会もその一つである。各学年の三クラスが縦割り、赤、黄、青に分かれて、応援団やリレーの練習などを子供たちが主体的に取り組む。そうした姿に、大正期からの教育の伝統を見る思いである。

「職場で教師は育つ」



岡根 茂

(S52・3卒
富津市)

学校に求められる教育課題は、年々多種多様となってきた。加えて、大量退職の時代を迎え、沢山の経験を積んだベテラン教員が現場から去っていく。学校は多くの若年層を迎え、彼らがどのように育つのか、どう育てていくのか、緊急且つ重要な学校現場の課題であるといえる。

昭和五十二年は私を含め職員が大量に採用された。今の状況と同じように、私たち若年層をどう育てていくのか、当時も大きな課題であったと思う。

私は、初任の時に同校に勤める千葉大の先輩から、「お前は学校に遊びに来ているのか。学級経営で勝負するのか、授業で勝負するのか、部活で頑張るのか決めろ」と喝を入れられたことを思いだす。

教育研究活動、官製研修、公開研究会への参加など様々な研修があるが、与えられたものをこなすだけではなく、個々が自らの実践

に対し「この一年の自分の課題」を明確にして、主体的に取り組んでいく姿勢が大切だと思う。

現在、嘱託として教職員の悩み相談を受けているが、職場で悩みを聞いてくれる管理職や同僚がないということも多く耳にする。

かつては、酒を飲み、学校に泊まっては同僚や先輩方と夜遅くまで、学級作りや部活動指導などの議論をしたが、今は

そんな光景は見られない。

職場の多忙化が、職員同士のコミュニケーションを阻害しているが、やはり職場での実践を通して職員は育つ。ただそれには、悩みや疑問を話し合える環境が必要だ。同じ世代の仲間がいて、ゆとりを持って聴いてくれる上司や先輩がいることが必要である。

上司や先輩が若い教師を育て、彼らが次の世代を育てる営みによって、現在の学校教育の礎が築かれてきている。我関せずではなく、隣は何をする人ぞという眼差しや声かけ、そして互いに切磋琢磨できる「チーム」で取り組む学校現場を創り続けてほしいと思う。

学校現場へ

発達障害児に対して

正しい理解と対応を！



伊藤 鉄夫

(S38・3卒
袖ヶ浦市)

退職して十五年目になるが、今でも「特別支援教育指導員」として年間五十校ほどの学校訪問をしている。

訪問の際は、授業参観をして児童生徒を観察したり、絵や作文などを見て、発達障害児(※)と思われる子を見つけ出す。

例えば、注意欠陥多動性障害児(ADHD)であれば、学力の遅れはないのに①文字や絵が乱雑②授業中の姿勢や態度がよくない③机の中やロッカーが整理さ

れていない④指名されないのに勝手に発言する、などの状況が顕著に現れている。

ADHD児は、知的障害はないのに落ちつきがなく、多動で集中力に欠け、ルールも守れないことが多い。元気で積極性があって良いのだが、自己中心的で対人トラブルも多い。このような特性を持

つADHD児に対して、どう理解してどう対応したらよいか、担任と話し合うことにしている。

まず、発達障害の出現率は、六・五%と多い。その原因は「脳機能の発達障害」である。親のしつけや愛情不足、あるいは本人のわがままではないのだ。

教師が、発達障害児の特性や原因を正しく理解せず、「しつけのできていないわがままでだらしない子」と思われている例が多い。

次に、発達障害児への望ましい対応として①ミスやトラブルを叱るより、できたことをほめる②複雑な指示や注文をしないで単純でわかりやすい指示を出す③話し言葉だけでなく、映像やカードなど視覚に訴える④状況によっては、教育相談や専門医への受診も必要となる。

教師が発達障害児を正しく理解し丁寧に指導すればADHD児などは、かなり落ちついてくるにちがいない。

※発達障害とは、自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害(LD)、注意欠陥多動性障害(ADHD)その他これに類する脳機能障害である。

特別寄稿



教育と文学と

「たった一人の真の知己を求めて」

葉山修平

わたしは戦後間もない昭和二十四年三月に千葉師範学校を卒業して、その四月に市原市の最南端の山村の白鳥中学校に、いわゆる

〈新卒〉として着任し、その翌年には最北端の海のある開けた町の八幡中学校に転任したが、その翌年四月に大学三年に編入し、二年後には大学院に進んだ。大学院生になってからすぐに県立千葉東高校（通信制）の教諭となり、その後県立船橋高校（定時制）に転じたのち、私立東京開成高校を経て、駒澤大学短大を七十歳で定年退職するまで、十九歳の時から五十余年に亘って教職についてきた。

その間、船橋高校在任中の二十七歳のとき、短篇小説「バスケットの仔猫」が室生犀星に知られ、その翌々年九月に長編小説『異形の群』が出版されて、題材が被差別部落ということもあって、新聞・雑誌で話題になり、さらにその翌年「日本いそつぶ嘶」が直木賞候補となったが、犀星の示唆もある

って、教師を続けながらの執筆という、いわゆる〈二足のワラジ〉を穿いて、これまで五十余冊の本を書いてきた。

小説を書くために、（二年間の新制中学校は別として）勤務は、〈通信制〉や〈定時制〉を選んだ。東京開成高校は、すべての教師が、大学と同じく、自分の教える時間に出勤し、終わればすぐに帰宅するシステムだったから、わたしは週に十六時間だけ拘束されたが、最後の短大では、一週間に〈四コマ〉出講すればよかったので、わたしは生涯〈二足のワラジ〉で過ごすことができた。生涯といったのは、現在でも、カルチャー教室で〈小説の書き方〉の講師として、週四日は二つの新聞社系とNHKなどの六教室に出講し、月に一度は金沢の中日文化センターで講座を持つているが、その間には、二つの隔月刊文芸誌に小説を連載しつつづけて、年に一冊の割で単行本を出版してきているからである。

こういうと、〈教育〉は小説のための便法にすぎないのか、と思われるかもしれないが、わたしにとっては、〈教育〉も〈文学〉も同じく〈命をかけたもの〉なのである。白鳥中学校では、生徒会を設立し、壁新聞をつくり、現場で戸惑っていた新しい教育法である〈コア・カリキュラム〉の実践に指導的立場で情熱を傾け、八幡中学校では卓球部の顧問として生徒と一体となって練習し、市内中学大会で優勝させた。中学三年の担任でもあったので、高校受験のための課外授業は夜間にまで及び、大きな効果をあげて校長に感謝された。また開成高校では、教科書のほかに生徒全員に年に四冊ほどの文庫本を買わせて読破させたし、新聞のコラム欄を毎日切り抜きさせて大学ノートに貼らせ、題名をつけさせ、要旨を書かせた。（これは、昭和三十五年から始めたが、わたしの生徒が受験塾で披露したため、ある塾がこれを取り入れ、今では一般的に行われるようになっていく）。

こうした〈創意〉や〈情熱〉は、そのまま〈文学〉に通じるものだろう。自分の世界観や人生観や美

学を〈全人的〉に誰かに伝えようとするものが、〈教育〉であり、〈文学〉であると思っている。もつといえ、〈文学〉は、〈たった一人の真の知己―理解者〉を求めた、何百人、何千人とない〈生徒〉に接するが、〈全人的〉に受け止めてくれる〈たった一人の生徒〉を求めているといえるだろう。こう考えると、〈教育〉も〈文学〉も、限りなく〈孤独な営為〉であり、闇に向かって石を投げているようなものである。（ここでいう文学は、作者独自の世界観、人生観、あるいは美学で造型される〈真の文学〉のことであり、〈読者〉を意識することなく自分自身に語りかけながら書かれるもののことである）。

〈教育〉についていえば、何年か、何十年かの後に、〈たった一人の真の理解者―教え子〉がいたことに、〈孤独な営為〉は報われるかもしれない。本来的に、〈孤独な営為〉である〈教育〉だが、そうでない思いで活動している諸賢がいるなら、それはそれで、世にも幸せなものとして祝福したいと思う。

（S24・3千葉師範卒 市川市）